青年期における基本的信頼感と対人関係

Sense of Basic Trust and Peer-relationship in Adolescence

弘前大学保健管理センター
田名場美雪・佐々木大輔・佐藤清子

Ⅰ　はじめに
　1.「基本的信頼感」と尺度
　2. 現代大学生の対人関係の度合い
Ⅱ　方　法
Ⅲ　結　果
Ⅳ　考　察

key words：sense of basic trust, Peer-relationship, Adolescence

Ⅰ　はじめに

自分自身に対する安心感について，これをエリクソンの提唱した概念である基本的信頼感の観点から吟味し，対人関係との関連から検討する。

1.「基本的信頼感」と尺度

発達の第一段階の危機「基本的信頼対基本的不信」は，乳児期に優勢になる心理社会的危機（個人の発達的欲求と文化の社会的期待とのあいだに生じる緊張状態）である。「基本的信頼感（sense of basic trust)」の発生はその時期に由来し，生後一年の経験から獲得される自己自身と世界に対する一つの態度であり，他者に関しては筋の通った信頼，自己に関しては信頼に値するという単純な感覚を意味する。この基本的信頼感の影響はこの段階にのみ限定されるのではなく，その後の発達段階で，その傷つきという形ではっきりと輪郭を表すとされている。つまり，第一段階以降もその感覚は維持されている。

従来の「基本的信頼感」尺度はエリクソンの呈示した概念を十分反映したものとはなっていないという批判があった。谷（1996）は，従来の尺度を再検討した結果，基本的信頼感の中心的な内容を示す「基本的信頼感」と，他者についての信頼感を表す「対人的信頼感」の２因子を抽出した。つまり，従来の基本的信頼感尺度は二つの異なる内容を測定していたことになる。したがって，両者を識別する必要性がある。また「基本的信頼感」は「対人的信頼感」に比べて，抑うつ傾向や特性不安と高い相関をもつことからも「基本的信頼感」と「対人的信頼感」は基本的に異なる概念であることが示されている。したがって，「基本的信頼感」はエリクソンの呈示するものを示すと仮定され，「対人的信頼感」項目はむしろ現実の人間関係に基づく感覚を測定すると言える。そこで，本研究ではこの考えにそいながら，「基本的信頼感」と「対人的信頼感」を区別しながら検討する。

大学新入学生にとっての「基本的信頼感」の意味を考えてみる。青年期には「個人的同一性対役割拡散」という心理社会的危機を迎える。そして，前述した第一段階の危機の問題は青年期には同一性の危機に伴って「時間的展望対時間的展望の拡散」として顕在化する。すなわち，青年期においては，乳児期以来形成されてきた基本的信頼感の程度と，それまでの自己の時間的連続性の統合の程度は非常に深く関わるのである。

2．現代大学生の対人関係の度合い

青年期は，自己への理解の深まりと，親密な友人関係への希求がその特徴としてあげられる。すなわち，両親への無意識の同一視が失われ，これによって不安定になった自己を安定化させるために親密な友人関係が求められるというものである。そしてこれがその後の青年の人格形成に大きな役割を果たすことが強調されている。このように青年が新たな自己像を形成するにあたっては，自分自身への関心の高さ，友人関係の親密さといった様相が大きく関与していると考えられてきた。

しかし，相談場面で，自他を傷つけることを恐れて，学生が相手との関わりと表面的なものにとどめる傾向が指摘されている（岡田，1993）。現代の青年の間には，対人場面での傷つきへの恐れから対人関係へのコミットを避け，その場の雰囲気がよければよいとする傾向がある。こういった現実場面での対人関係の傾向は，前述の対人的信頼感の低さと関連すると推測される。

仮　説

①基本的信頼感は同一性の感覚の中核をなすと考えられる自己の時間的連続性の感覚と密接に関わる。

②対人的信頼感は基本的信頼感とは本質的に異なるものであり，後者の方が時間的展望との関わりは大きい。

③対人的信頼感は現実の人間関係に関連するので，対人回避傾向との関連が高い。

Ⅱ　方　法

全新入生に対して郵送法による質問紙調査を実施した。詳細は以下のとおりである。

①調査対象者：弘前大学の人文学部・教育学部・医学部・理工学部・農学生命科学部の平成11年度新入生1250名（うち，女子555名）。回答者数1120名（うち，女子533名）。分析対象1110名（うち，女子530名）

②調査方法：郵送法による記名式の質問紙調査である（回収も郵送で行った）。入学手続き書式等と共に送られる書類の中に保健管理センターからの『健康調査書』が含まれるが、この一部をアンケートとして使用した。実施した質問項目は付表のとおりである。「対人的信頼感」「時間的展望」「対人回避傾向」尺度全質問項目に対して，評定はいずれも０（あてはまらない）から５（あてはまる）までの５件法によっている。同時に過去一年間に自殺を考えたことがあるか否かについても尋ねている。

③調査時期：平成11年３月末から４月初旬にかけて実施。統計的解析についてはSPSSを使用した。

Ⅲ　結　果

各尺度についての全回答者および男女別での平均と標準偏差を表１に示す。「対人的信頼感」「時間的展望」「対人回避傾向」尺度について男女間で有意な差が見られた。つまり，「基本的信頼感」には男女差がなく，それ以外には男女差がみとめられた。

次に各尺度間の相関をみてみる。表２に示すとおり，「基本的信頼感」「対人的信頼感」「時間的連続性」「対人関係回避傾向」の間においてすべてに有意な相関（$p<.001$）がみとめられた。特に，「基本的信頼感」と「時間的連続性」との相関が高く（$r=.614$），「対人的信頼感」と「時間的連続性」の相関（$r=.496$）よりも強いものとなっている。このことは，「基本的信頼感」と「対人的信頼感」とは本質的には異なるものである可能性を示している。「対人関係回避傾向」は，「対人的信頼感」との相関が高い。「対人的信頼感」は現実の人間関係を反映していることを示している。

表1　各尺度の平均と標準偏差

	全体（N=1110）	男子（N=580）	女子（N=530）	男女間比較（t）
基本的信頼感	15.79（5.10）	15.61（5.25）	15.98（4.94）	1.23
対人的信頼感	14.26（6.52）	13.69（3.70）	14.88（3.19）	**5.74
時間的展望	19.26（5.04）	18.57（4.99）	20.02（4.99）	**4.84
対人回避傾向	7.45（4.68）	8.02（4.90）	6.83（4.35）	**4.27

注）**P<.001

表2　各尺度間の相関

	なし（N=1031）	あり（N=79）	比　較(t)
基本的信頼感	16.23（4.84）	10.05（4.97）	**10. 9
対人的信頼感	14.42（3.50）	12.18（3.12）	** 5.74
時間的展望	19.63（4.86）	14.48（4.99）	** 9.06
対人回避傾向	7.31（4.64）	9.37（4.84）	** 3.79

注）**P<.001

さらに，自殺を考えたこと「無群（1031名）」と「有群（79名）」を比較したところ，「基本的信頼感」（t(1108) =10.90, p<.001）「対人的信頼感」（t(1108) =5.54, p<.001）「時間的連続性」（t(1108) =9.06, p<.001）「対人関係回避傾向」（t(1108) =-3.79, p<.001）すべてにおいて有意な差がみられた（表3参照）。自殺を考えたことのある人は，考えたことのない人と比較すると，基本的信頼感が低く，対人的信頼感が低く，時間的展望が低く，対人回避傾向が強いと言える。

表3　自殺を考えた経験の有無との関連

	基本的信頼感	対人的信頼感	時間的展望
対人的信頼感	** 0.30		
時間的展望	** 0.61	** 0.50	
対人回避傾向	**-0.28	**-0.49	**-0.39

注）**P<.001

Ⅳ　考　察

「基本的信頼感」には男女差がなく，それ以外には男女差がみとめられたことから，発達のごく初期にその源泉をもつ「基本的信頼感」は性差には関係なくきわめて本質的なものであることが考えられる。「対人的信頼感」「時間的連続性」は，発達の各段階で顕現してくるものであるが，そのの内容には男女差がある。なぜならば，たとえ各段階での発達課題が男女に同等であっても，男女両性では同じ状況が異なった様相をもって立ち現れてくる（氏原，1990）からである。同じように「対人関係回避傾向」は，現実への対応をあらわすので，男女差が出てきたと説明できよう。

「基本的信頼感」と「時間的連続性」との相関はきわめて高いものであった。青年期の課題として「時間的連続性」が重要であることが伺われる。そして，「基本的信頼感」と「対人的信頼感」とは本質的には異なるものである可能性を示している。「対人関係回避傾向」や「対人的信頼感」は現実の人間関係を反映するものであり，「基本的信頼感」と「時間的連続性」は，より基底的な部分，いわゆるアイ

デンティティにかかわるものである。

自殺を考えたことのある人は，考えたことのない人と比較すると，基本的信頼感が低く，対人的信頼感が低く，時間的展望が低く，対人回避傾向が強い。特に「基本的信頼感」と「時間的連続性」においてその得点差が大きい。青年期にはエネルギーが内省へと向かい，それが過ぎると自殺という行動を導くことさえあるということから考えても，自殺を考えたことのある人が「基本的信頼感」と「時間的展望」に低い得点を示すことはもっともと言えよう。

相談場面を想定して考えてみると，現実の対人関係のトラブルが解決しても，基本的信頼感の不十分であれば，不満足感が残ることや，現実場面で重大なつまづきを経験しても基本的信頼感が確保されている人は克服したときに大きな満足感が得られることが推測される。

相談を受けているときに感じたことがある。それは，目の前にある対人関係的な問題について話し合っているのに，なぜか「昔話」を始める学生がいる。よくよくきいてみると，どうやら自分に対して安心感をもったことがないのだと伝えたいらしい。自分の感覚や振る舞いに安心感をもっていない。だから，目の前の対人関係がよくなってもほんとうは安心できていない。自分自身に安心しているかどうかということは，とても重要なことなのだ。

引用文献

氏原　寛ら共編　1990　現代青年心理学：男の立場と女の状況培風館

岡田　努　1993　現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係　発達心理学研究，第4巻，第2号，162-170

谷　冬彦　1998　青年期における基本的信頼感と時間的展望　発達心理学研究，第9巻，第1号，35-44

Erikson,E.H　1959　Identity and the life cycle　Universities Press,Inc.（小此木　啓吾訳編「自我同一性」1973　誠信書房）

付表　使用した質問項目（※は逆転項目）

「基本的信頼」尺度

※①物事がうまくゆかなくなると、自分の中にひきこもってしまうことがある。

※②自分自身のことが信頼できないと感じることがある。

※③人から見捨てられたのではないかと心配になることがある。

※④人生に対して、不信感を感じることがある。

※⑤失敗すると二度と立ち直れないような気がする。

⑥私は自分自身を十分に信頼できると感じる。

「時間的連続性」尺度

※①今の自分は本当の自分ではないような気がする。

※②私は過去の出来事にこだわっている。

③今の生活に満足している。

※④過去のことはあまり思い出したくない。

※⑤毎日が同じことのくり返しで退屈だ。
⑥私は自分の過去のことを受け入れることができる。
※⑦私の過去はつらいことばかりだった。

「対人信頼感」尺度

⑭自分が困ったときには、まわりの人々からの援助が期待できる。
⑮普通、人はお互いに誠実にかかわりあっているものだと思う。
⑯一般的に、人間は信頼できるものであると思う。
⑰周囲の人々から自分が支えられていると感じる。
※⑱私には頼りにできる人がほとんどいない。

「深い関わり回避」尺度

※①おたがいに、心を打ち明け会う。
※②人間の生き方などについて真剣に話し合うことがある。
※③友だちと精神的に深い関係をもちたい。
④友だちと真剣に議論することは恥ずかしいことだ。
⑤友だちには自分の本心は見せない。
⑥友だちとはあたりさわりのない会話ですませている。
⑦友だちと意見が対立するのが怖い。